正義三つ

九九人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正義三つ

【Ｎコード】
Ｎ６３４０Ｚ

【作者名】
九九人

【あらすじ】
正義のために戦う人間三人が、ある夜邂逅する話

一つ（前書き）

最初は「眠れないから小説を書く」だったのに、気づいたら「小説を書いてるから眠れない」になっていました。小説を書く人ならよくある話

一つ

ある夜の事である。町内をパトロールをしていた巡査の森田正義(もりたまさよし)は、銃声を聴いてしまった。銃声はやけに夜の空に響いて、驚いた鳥たちがばさばさとどこかへ逃げていった。

平々凡々と云った言葉が似合う町内である。暴力団組織もいない、事件など家出娘の捜索程度しかないこの町で、銃声などという音はあからさまに異質だった。森田は自分の銃が暴発した事を第一に疑ったくらいだ。

しかし、銃を携帯していなかった事に気付き、暴発ではない事に森田は安堵した。と同時に、背筋が震えた。

原因が自分でないとしたら、銃を所持している人間がこの近くにいて、その人間が発砲したという事だ。たとえ同業者がやむおえず発砲したのだと思ったところで、それは発砲せざるを得ないほどの危機が、その同業者に迫っていたという事だ。

事件だった。

正直、足が震えた。

森田は人を守る勇敢な警察官だったが、同時に臆病な人間でもあった。一通りの訓練は受けているが、平和なこの町で暮らしていく内に腑抜けになってしまった。今じゃカミさんの怒鳴り声にだって怯えてしまうほどだ。おまけに武器すら持っておらず、丸腰。銃声などという非日常な脅威に対抗するには心もとない。

聴かなかったフリをして、逃げてしまおうかと考えた。今なら誰

も見ていない。抜き足差し足忍び足で、派出所に逃げ帰って銃声は他の同僚に対処してもらえばいい。

しかし、森田は踏みとどまった。

森田は臆病な人間である前に、勇敢な警察官だった。警察官は、人を守る職業だ。自分はその在り方に憧れたから警察官になったんじゃないか。

森田の名前、正義（まさよし）は死んだ祖母が付けた名だ。自分の正義を貫けるような男になりなさい、との意味でつけた名前だと、生前の祖母は語っていた。今こそ自分の正義を証明する時だった。

森田は震える足を止めるため、自分の頭を思いっきり電柱に叩きつけた。

痛い。当然だった。

けど、拳銃で撃たれた人間は、これよりもっと痛いんだろうなあ、と考えると、今度は正義に燃えた。助けなければならない人間がこの近くにいる。そうでなくとも、銃声を聞いた市民が見に行って巻き込まれる可能性がある。

森田は自らの正義と警察官の義務のため、銃声が聞こえた方向へと自転車を漕いだ。

二つ

銃声を鳴らしたのはベレッタＭ９２という拳銃だったが、蒲田美代子にとって拳銃の名称などというのはどうでもいい事だった。ただ、目の前の人間を確実に死に至らしめる事が出来るなら、『バールのようなもの』だろうと毒薬だろうと何でもよかった。

一発目は見事に外した。思いのほか威勢のいい音を鳴らしてしまって、近くの家の窓が次々と開いて何事かと騒ぎ始めてしまった。美代子は小さく舌打ちを鳴らした。

「……な、何？　何の音？」

そして殺したいと思った対象――倉野仁志は、何が起きたのか理解していないらしく、すっとぼけた表情をしている。そのカオが憎らしくて、美代子はもう一発銃を撃った。

「う、うひゃあああああ！」

今度は倉野の右肩に当たった。倉野は肩を押さえ、人間とは思えないような絶叫をしてその場にうずくまった。

心臓を狙ったのに。つくづく自分はノーコンだな、と思った。そういえば高校時代の体育の授業では、球技は全て下手だった。サーブが思った場所に入らず、あさっての方向に行ってしまうのだ。それがちょっとしたトラウマで、体育はほとんど見学していた。それに比べれば肩に当たるだけマシだ。

美代子は一歩、足を踏み出した。倉野との距離は一メートルほど。

倉野の自宅近くで待ち伏せして、帰宅する彼を狙ったのだ。それなりに綿密な殺害計画を立てていた。殺した後の事は全く考えていない。

倉野は金融業者の社長だった。それだけならまだいいが、一般的には接頭に『悪徳』という名称がつくような、美代子からすれば悪魔のような金融業者だった。

美代子には将来を約束した恋人がいた。自分みたいなドジで器量も周囲より劣った女にはもったいないような、素敵な恋人が。

彼は細筆で描いたような眉を持ち、頬はシャープで彫の深い顔をして服のセンスも良く、おまけに気配りも出来て優しい、端的に云えばイケメンだった。顔だけ、なんていう世間にありふれた偽物ではなくて、本物のイケメン。美代子の考えうる限り、彼は最高の男性だった。彼が借金をしているという事実以外は。

正確に云ってしまえば借金をしていたのは彼の両親で、彼は借金を無くそうと身を粉にして働いた。しかし働けども働けども借金は減らず、むしろ年々増える勢いだった。しかし、美代子には苦しそうな顔など一度も見せた事もなかった。だから美代子が、彼が多額の負債を抱えている事を知ったのは彼の死後だった。

自殺だった。

美代子はまずそんな恋人の様子に気付けなかった事を悔やんで、次に彼の両親を憎んだ。葬儀の場で思いっきり罵倒して退場させられたが、それに関してはあまり後悔していない。次に美代子は、彼らが借金をしていたところについて調べた。それが倉野の業者だ。

彼らは悪質だった。彼らの造り上げた借金のシステムは、利用者が返済する事を想定していないも同然で、ただただ弱者を苦しませる事を目的にしているとしか思えなかった。実際、彼らのせいで何人もの人間が自殺をしているようだった。

美代子は彼らが許せなかった。最愛の恋人が死んだ原因。それでなくとも倉野みたいな悪人は、敵だ。人が苦しむような事を自ら進んでやる、弱者の敵。悪者。自分の感情が多分に含まれているにしても、倉野のような人間はいなくなったほうが社会のためだと思った。だから殺そうと思った。それが蒲田美代子の正義だった。

銃はインターネット経由で手に入れた。今の世の中、努力さえすれば、物に関しては必ず手に入るようになっている。いくらかの時間とお金を代償にして。

美代子がさらに一歩、倉野に近づいた。両者の距離は五十センチほど。いくらノーコンの美代子でも、ゼロ距離から拳銃を撃てば狙った部位に当たるだろう。

美代子は自らの正義と恋人の敵のため、拳銃を構える。

三つ

撃たれた肩の激痛は、地獄のようだった。

人体は異物が貫通する事を想定していない。女性ならともかく、男性ならなおさらだ。ましてや肩だ。肩に穴が開いたのだ。想像を絶する痛みだった。

美代子の撃った銃弾は貫通しておらず、肉に食い込みながらも肩の内部に残っていた。それがさらに異物感となり、倉野の痛みを増長させた。

「うぁぁぁぁぁぁ」

倉野は声にならない悲鳴を上げた。上げたくて上げているのではない。身体が勝手に上げているのだ。痛みというものは、自分自身から全てのコントロールを奪うほどの、強い感覚なのだ。

コツン、というハイヒールの音がした。倉野の視界は痛みで現実と幻の境界があやふやになり、何故かＳＭプレイを連想させた。女王様に這いつくばる自分。血を流し続けるこの肩も、女王様に鞭で打たれたと思えば痛くない、むしろ快感――な訳がなかった。そんな妄想では払えぬほどの痛みが、倉野を襲い続けていた。

コツン、というハイヒールの音がまた鼓膜に侵入してきた。それは危険の合図なのだと倉野の鈍りきった生存本能が告げ、幻から現実へと立ち返った。

この音は、つまりは銃を持った女が自分に近づいてきているのだ。

このハイヒールの音がしなくなった時、自分は死ぬのだろう。名も知らぬ女性に拳銃で撃たれて。

それは嫌だ、と倉野は思った。

倉野は他人から恨まれるような仕事をしている。自分はろくな死に方は出来ないだろうと常々思っていたが、まだ死ねない、死んではいけなかった。

倉野は離婚をしている。娘が二人いて、二人とも自分が親権を持っていた。

男親一人というので娘たちには狭苦しい生活をさせているだろうし、ただでさえ倉野は人には自慢できない職業をしている。彼女らにとって良い親であるはずがなかった。

せめて、金銭面での不自由だけはさせたくなかった。自分がこんな職業をしているのは、もうしょうがないと割り切っている。借金をさせるほうもさせる方だが、借金をする方にもそれなりに原因があると開き直ってすらいる。

娘たちを守るためなら、いくらでも泥を被ってやる。家族を守るためなら、いくらでも悪人を演じてやる。それが倉野の正義だった。

せめて、二人が成人式を迎える日までは死ねない。自分が死ねば、二人を路頭に迷わす事になってしまう。金が全ての世界で生きてきた倉野は、金の無くなった女たちの悲惨な末路を何度も見てきた。娘たちにだけは、そんな思いをさせたくない。

守るべき娘たちのいる家は目と鼻の先にあった。

電気は消えているので二人はもう寝ているのだろう。しかし、玄関前に辿りつくには拳銃を持った女を通り過ぎていかなければならない。そんなのは無理だ。生きてあの玄関をくぐるのは難しいだろうな、と思った。次にくぐるのは葬式の時だろうか。自分の棺に泣きじゃくる娘を想像して、倉野はその想像をかき消した。

生きなければ。倉野は人生で初めて、自覚的にそう思った。しかし、痛みはひどく、立ち上がるために足に力を込める事すら困難そうだった。

そこで倉野は、こてん、と転がるように女から遠ざかった。遠ざかったと云っても距離的には半歩か、せいぜい一歩程度だ。転がりながら地を這う倉野の姿は無様で、ダンゴムシか何かのようだった。しかし、無様でもよかった。これで倉野は最低でも半歩分は長く生きながらえる事が出来た。半歩の時間、娘たちの父親でいられる時間が増えた。

一度地を這ってみると、自分の身体がもう少しだけ動かせる事が出来るのに気付いた。あともう少し、女から逃げられるかもしれない。

倉野は自らの正義と生きるため、もう半歩死神から遠ざかった。

三つ（後書き）

次回完結。今日中に書きます。１２／２１

エンド1

森田は美代子を殺人未遂で現行犯逮捕し、倉野は間一髪のところで助かった。しかし、平和な住宅街で起きた日本では珍しい、一般人が銃を使った犯罪という事でニュースでは大きく取り上げられ、被害者であった倉野の職業に関しても大々的に報道された。美代子に関してもその動機が世間の同情を集め、悲劇のヒロインじみた扱いを受けるようになった。

その結果、悪徳金融業は大きな社会的問題となった。金融業の在り方が見直され、政府でも対応策が進められた。倉野のひきいる業者はやりづらくなり、ついに彼らは店を畳まざるをえなかった。

美代子の正義は一応の報われ方をした。復讐は果たせなかったが、これ以上自分の恋人のような人間が倉野によって苦しめられる事はない。

「よう、ヒーロー。昨日は大活躍だったらしいな」

森田は所内で同僚に会う度、ヒーローなどと呼ばれるようになった。ニュースでこの事件が取り上げられた際、逮捕した警官としてインタビューを受け、悪ノリをしたインタビュアーがそう呼び始めた事がきっかけだった。それほどにまでこの事件は大きく報道されたのだ。

気弱な青年である森田は、こう呼ばれる度にこそばゆい思いをした。同時に、ほんのちょっぴり自分に自信を持てるようになった。先輩警官からは「お前、いい顔をするようになったな」と背中を叩かれ、婦人警官の間でも少し人気が上がった。森田が巡査から巡査部長に昇進する日も近いかもしれない。

一方、金融業を畳まざるをえなかった倉野はやけになってラーメン店を開業した。最初は鳴かず飛ばずだったものの、昔の仲間たち

を中心に客は徐々に増え、そこそこには繁盛するようになった。そうなってしまえば、元は金融のトップだった倉野である。店の経営に関しては文句なしの才能があり、倉野ラーメンは近隣住民から愛される店となった。

店が軌道にのり、忙しくなってくると、娘たちも時々だが手伝ってくれるようになった。

事件当時はまだ幼かった娘たちも歳を経るごとにどんどんと美しくなっていった。どうやら上の娘には彼氏がいるらしい。「お父さん、彼氏に会ってよ」と云われるが、何だか無性に腹が立っていまだに一度も会ってはいない。この分だと、倉野が孫の顔を見る日も、そう遠くない未来なのかもしれない。

了

エンド1（後書き）

もう一つ話があります

エンド2（前書き）

エンド1で満足された方はこの話は読まないでください

エンド2

「おい！　そこで何をしている！」

銃を構えた美代子の耳に、そのような声が後ろからした。目の前には無様に転がる憎い怨敵、倉野がいたが、美代子はとっさに振り向いた。そこには制服を着た警官がいた。美代子は条件反射のように引き金に力が入り、ベレッタを撃った。

「えっ……？」

驚きの声は、警官と美代子、二人のものだった。

警官は自分の胸から湧き出るように流れる血を不思議そうに眺めながら、そこに手を当て、あっけなくぱたりと倒れた。

美代子は倒れた警官に駆け寄り、脈をとった。顔色はまだ白くなく、血色も良い。けれど、もう五分もすれば真っ青に染まるだろう。――つまり、もう、その警官の脈は止まっていた。

「いやあああああ！」

そもそも、当てるつもりもなければ撃つつもりもなかったのだ。ただ、条件反射だった。撃った後に「あ、撃っちゃった。まあいいや。威嚇射撃って事で」なんて暢気に考えるほどに。ろくに構えてすらいなかった。

自分の復讐に、関係のない人を巻き込んでしまった。誰かを巻き込むつもりなどなかったのだ。これは自分一人の復讐なのだから。

警官の身体は握った右手から冷たくなっていく。警官は若い男で、その死体が自分の恋人の姿と被った。

「ヒ、人殺しっ」

後ろで倉野が引き攣ったように叫んでいた。

「……どの口が云ってんのよ」

倉野にだけは云われたくなかった。何人もの弱者を自殺させてきた倉野にだけは。

ベレッタを片手で持ち、乱射した。引き金を引く度、パン、パンと大きな音が鳴り、腕に大きな反動がくる。しかし、一発も倉野には命中しなかった。その内に、倉野はどこかに逃げ去ってしまっていた。平和な住宅街には、警官の死体と美代子だけが残された。

美代子は力が抜けて、ぺたんとその場に座り込んだ。遠くからサイレンの音がする。窓からこちらを覗いている住民の誰かが通報したのだろう。しかし美代子にとってはどうでも良い事だった。美代子は自分のノーコン具合に、つくづく笑うしかなかった。当てるつもりもなかったのに罪のない警官を殺し、当てるつもりで何発も撃って一発も倉野には命中しなかった。

誰かに慰めてほしかった。

けれど、この場に美代子の味方はいない。自分一人だ。美代子は自分のこめかみに銃口を当てた。撃ったばかりの銃口は熱く、こめかみが火傷をした。

「ごめんね。今行くからね」

最後の瞬間、美代子は恋人の名前を云って引き金を引いた。この日、銃声がこれ以上平和な住宅街を脅かす事はなかった。

この事件は大々的にマスコミに取り上げられた。平和な住宅街で起きた、殺人未遂事件。日本では珍しい、一般人が銃を使った犯罪だ。当然被害者についても大きく取り上げられ、容疑者の動機が解明されていく内に悪徳金融業が社会問題となった。社会は倉野とその業者を徹底的に弾劾し、倉野の金融業は倒産した。やけになって始めたラーメン屋も鳴かず飛ばすで終わり、倉野はついに首をくくった。

小さな娘二人は施設に預けられたが、そこでも『何人もの人間を自殺へ追い込んだ悪人』の娘として相応の扱いを受けた。

殉職した警官――森田正義は二階級特進し、警部補として扱われ、棺に納められた。森田の母は警部補として相応の手当を貰い、森田の上司から頭を下げられたが、何一つ喜びなどなかった。

警察官になると云いだした息子を、何故反対しなかったのか。過去の自分を過ちを、彼女が亡くなるまで繰り返した。

警官一人を射殺し、市民一人に軽傷を負わせた凶悪犯、蒲田美代子の自殺はしかし、自殺未遂で終わった。

彼女は知らなかった。こめかみに銃を当てての自殺は、弾丸が頭蓋骨に反って額の肉を削るだけで終わる事が多く、失敗率が高い事を。銃で自殺をしたいのなら口に銃を咥えての自殺が一番効率が良い事を。

しかし彼女の銃弾は脳を損傷し、脳と身体を接続していた神経を破壊しつくしていた。彼女は植物状態となったが、それでも生きていた。生きる事を苦しむだけの感情はちゃんと持っていたし、魂はきちんと現世にあった。だから彼女は恋人の元へ行けないまま、自殺すら出来ずに人一人を殺した罪悪感に苦しんでいる。

三人の正義は一つとして報われないまま、今日もどこかで正義と正義が互いを潰しあっている。

了

エンド2（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6340z/

正義三つ

2011年12月21日20時07分発行